

大阪府の災害対策と基幹災害拠点病院の取り組み

(吉岡敏治ほか、全自病協雑誌 2014; 53: 17-21)

2019年3月8日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

災害時には多数の情報が交錯するが、より多くの傷病者を救命するためには、医療に関する情報を正確に収集、その情報をもとに傷病者を被災地外の病院に搬送することが重要である。平成 24 年に大阪府立急性期・総合医療センターと大阪府において傷病者情報収集と搬送に関していくつかの画期的な取り組みを行ったので以下に記載する。

## 1. 傷病者情報収集ツールとしての災害対応無線患者管理システム (Smartphone supports patients and selects priority in disaster sites : 3SPiders)

多数傷病者が発生する災害現場では搬送の優先順位を決めるために紙のトリアージタグが利用され、多数患者が搬送された病院の災害対策本部は、タグに記入された病院前患者情報と入院後経過情報を集約する必要がある。情報集約に際して、従来使ってきた無線、電話、紙や伝令による情報集約は、情報伝達の方向や使用人数が限られていることから、しばしば伝達内容が不正確に伝わり情報の混乱を引き起こしてきた。3SPiders は大阪府立急性期・総合医療センターが大手電機メーカーと共同開発したスマートフォンと IC タグを使った患者情報集約ツールである。使用方法としては、①傷病者に IC タグを付与し、スマートフォンで名前、顔写真、診察結果などの情報を打ち込む②同時にネットワークサーバーにも同じ情報を発信する③本部でリアルタイムに情報収集する④傷病者の病態変化は、スマートフォンで IC タグに追加書き込みをする、以上の流れで行われ、電子的に情報を収集し伝達することで、正確かつ多人数が一気に情報共有できるメリットを持つ。後述する八尾 SCU にもサーバーを設置し、災害時に基幹災害拠点病院であるこのセンターと航空搬送拠点臨時医療施設とが情報共有できるシステムが完成している。

## 2. 傷病者搬送のための八尾 SCU の整備

東日本大震災後の災害医療の課題として、広域搬送拠点の整備と災害拠点病院の機能強化が挙げられた。それらに対する取り組みとして重要となるのが Staging Care Unit (SCU) の整備である。SCU は日本語では航空搬送拠点臨時医療施設と呼ばれ、航空機搬送に際して患者の症状の安定化を図り、搬送を実施するための救護所として、必要に応じて被災地域及び被災地域外の航空搬送拠点に設置されるものである。大阪府は八尾空港近傍の大阪府中部広域拠点内に非常用発電機や衛星通信設備を確保し、必要な医療機器などを備えた建屋を平成 23 年度末に整備した。これは全国初の常設型の航空搬送拠点臨時医療施設であり、大阪府立急性期・総合医療センターとの患者搬送訓練が取り組まれている。

以上より、当センターでは災害医療の問題となりつつある広域搬送拠点の整備と災害拠点病院の機能強化の改善に取り組んでいる。